

パール・ハーバーの奇襲で破壊されたアメリカの戦艦

しのついたそのページをそつとめくるたびに、そして先生がその授業をやる日のことを思い浮かべるたびに、わたしは、悲しい、腹立たしい、つまらない、いら立つのいずれでもない、本当に憂鬱としか言いようのない気分になるのだった。

そもそも、日本について、野蛮な人力車や戦闘的なサムライの国といった説明は奇妙に思え、床に寝て、部屋を紙で仕切って暮らす、という

アメリカン・スクール  
アメリカ国外の子女に、アメリカの教育を受けさせるための学校。

ルネッサンス  
十五世紀から十七世紀にかけて起こった、ヨーロッパの学問・思想・芸術の革新運動。神中心から人間中心へ、価値観が変わっていった。

きのこ雲  
広島、長崎に投下された原爆の原

虫  
\* 腹

# パール・ハーバーの授業

猪の口邦子

それは小学校の最後の年のことだった。わたしはブラジルのサンパウロにあるアメリカン・スクールに通っていた。その年の社会科の科目は世界史だったが、そのことで幼いわたしの心は憂鬱であつた。憂鬱という気分の状態を本当に知るようになったのは、おそらくこのころではなかったかと思う。

授業で古代ギリシアやローマのことをやっているころから、わたしは教科書の最後の方にあるページを何度も何度も読み返していた。授業がルネッサンス迎りの時代にさしかかったころには、人力車の挿絵ときのご雲の写真が載っているそのページをほとんど暗記してしまっていた。パール・ハーバーという大きな見出し

パール・ハーバー  
一九四一年十二月八日、日本海軍は、ハワイのパール・ハーバー（真珠湾）に集結していたアメリカ太平洋艦隊を攻撃し、大打撃を与えた。アメリカ側の死者多数。アメリカに対する最後通牒が送られたため、この攻撃は国際法違反の奇襲だと非難された。

ブラジル  
南アメリカ東部の国。サンパウロはその最大の都市。

\* 幼

挿

た書き方もショックであった。とはいえ、この程度のことには、そのころのわたしは既に慣れっこになっていた。

しかし、パール・ハーバーの授業は別である。それは、わたしにとって初めてのパール・ハーバーの授業であり、しかもわたしは、クラスでただ一人の日本の子として、その授業に臨まなければならなかった。教科書は、日本がいかに悪魔的な世界征服の野心と狂気で、平和なアメリカを驚愕させたかを、意地悪いタッチで記述している。野蛮で遅れた国民が、自由と正義を体現した偉大なアメリカに対してこつけない挑戦をしかけたこと、そしてその野望は原爆によつてつにくじかれたことなどが、物語のようにつづられている。それは、まさに善と悪の対決であり、世界の救世主対悪魔の落とし子の対峙する構図であった。

一年も終わりに近づき、第一次世界大戦の話も終わってしまった。わたしはひそかに対策を練っていた。なんとか仮病で母をだまして、その日、学校を休むという作戦である。

ぜんそくの発作と腹痛を、前の晩から自分でも驚くほどの大胆さで演じてのけ

野 心

驚 愕

対 峙

\* 嘘

挑 胆

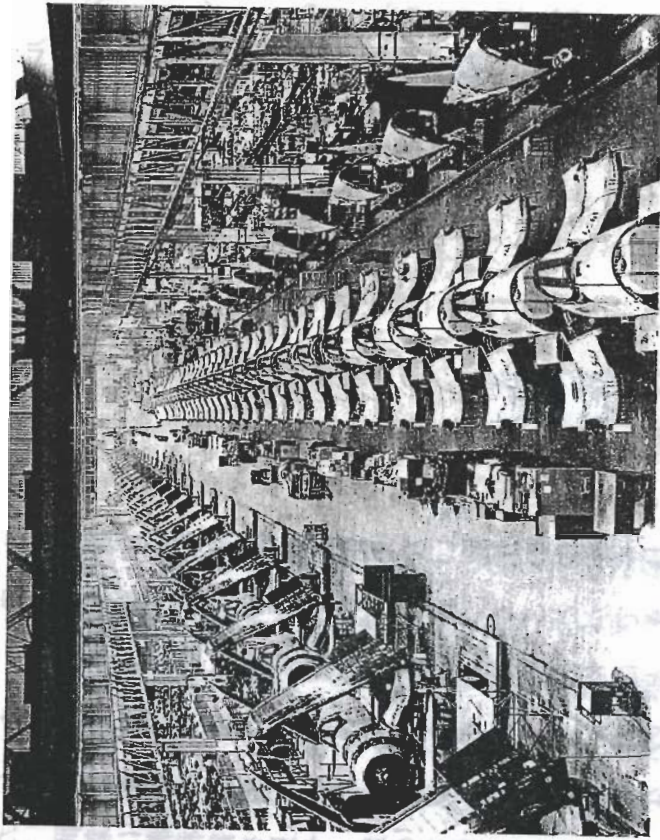
た。両親に教科書を見せ、親の世代に対する怒りをぶつけて、堂々と学校を休むということ、なぜかわたしはしようとは思わなかった。思えば、わたしは幼いなりに、異郷で精いっぱい、親をかばっていたのかもしれない。

そのせいか、仮病を演じたことの罪悪感はほとんど感じないでいた。ただ一つ最後まで気になって、なかなか寝つくことができなかつたのは、世界史の先生のことだった。その先生は見えない魔法のつえを持っていて、授業が始まると、いつの間にか教室全体に昔の世界が広がっていった。わたしはその先生が大好きだった。パール・ハーバーの授業を休んだら、先生はどう思うだろう……その答えはついに見つからなかった。

朝になつて、何度、母が起こしに来ても、わたしはベッドを離れようとしなかつた。しばらくすると、母は、パンがゆを作つたから起きる？ と、聞きに来た。病気の時、母はいつもパンがゆを作つてくれた。母は病気を信じてくれたのだろうか……わたしはそのかすかに甘いパンがゆを食べながら、やっぱりスクール・バスに乗つていこうと思つたのだつた。

パンがゆ  
パンを煮きって  
煮て、おかゆ状に  
したもの。

甘



第二次世界大戦下のアメリカの軍需工場

世界史の教室に入る。足早に自分の席に向かうわたしに、「ハイ、クニコー！」と先生は声をかけてくれた。その声の明るさに、かえってわたしの心は緊張した。

授業がどう始まったのか、覚えていない。わたしはまるで石のように微動だにせず、教科書のそのページを開いたまま、下を向いていた。緊張のあまり、周囲から音が消えてしまったかのようなだった。

先生が黒板に何かを書いて

図 微動だにせず

日本の資源輸入を困難にしていた。一九四二年八月、アメリカは日本への石油輸出を停止した。

いる……日本の石油の輸入の割合だ……おやつ……教科書にそんなこと書いてあったっけ……。先生の声が耳に戻ってくる。先生はどんどんしゃべっていく。日本は資源が乏しいこと、発展するために外国から資源を輸入しなければならないこと、どんなに資源の乏しい国でも、貿易によって発展する権利があること、しかし、欧米諸国は、アジアの国が発展し過ぎることは許せないと思っていたこと、そこで、日本の資源輸入を困難にしていたこと……しかもなんとアメリカは、実は、欧州戦に参戦する契機をつかもうとしていたこと……違う！教科書と全く違うことを先生は授業でしゃべっている！

先生はたった一人の生徒のために、その授業をやってくれたのだった。クラスのだれもが、授業の内容が教科書と全く違うことに気がついてた。しかし、いつもは活発な生徒たちの一人として、そのことを問う子はいなかった。

戦争には、たくさんの原因がある、と先生は言った。戦争だけでなく、国と国との間の事件には必ず複雑な背景がある——それを単一原因論に短絡させてしまうのは、歴史に対する暴力だ——と先生は授業を閉じた。

欧州戦に参戦……かもうとしていた。当時、欧州（ヨーロッパ）では、ドイツ・イタリアと、イギリス・フランス・ソ連が戦っていた。アメリカ政府に参戦の意思はあったが、国民の支持が得られていない状況だった。パール・ハーバー以降、世論は参戦支持に傾いていく。

単一原因論

物事がたった一つの原因から生じたと考えられること。

図 短絡

7 契

部屋を出る時、先生に心から何かを言いたかった。けれど、ひと言でもしゃべったら、涙が一気にあふれそうだった。かつてないほど、わたしはパール・ハーバーを恥じていた。それでも、日本非難の矢面に立たないで済んだことに、わたしの中の子供の部分は本当に救われたのだった。

○画＝おもて

しかしその時わたしは、わたしの中にもう一人の自分を発見する。もはや子供とは呼べないそのもう一人のわたしは、国際関係の複雑なからみ合いを解明していく仕事を、そして平和の追求にかかわる仕事を夢見ていた。



猪口邦子 女。国際政治学者。千葉県に生まれた。研究のかたわらテレビのニュース解説にも取り組むなど、幅広い活動を行っている。『戦争と平和』などがある。本文は『母の加護』によった。

### 学びの窓

考える——理解するために

「わたし」の気持ちが表示されている部分を追って抜き出し、その気持ちを明らかにしよう。

書く——理解を深めるために

「そのことを問う子はいなかった。」(P.129・11)とあるが、クラスの子供たちの一人になって、その思いを短い文章で書いてみよう。

読む——理解を深めるために

作品の理解に基づいて、工夫して音読・朗読しよう。

調べる——理解を広げるために

外国の教科書や本の中で日本がどのように書かれているか調べ、紹介し合おう。

#### ●新出漢字と用例

|                                  |                                  |                                  |                                  |
|----------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|----------------------------------|
| 124 挿 <small>ソク</small><br>挿話    | 126 挑 <small>チョウ</small><br>挑発   | 127 甘 <small>カン</small><br>甘言・甘酒 | 128 契 <small>ケイ</small><br>契約・黙契 |
| 125 蜜 <small>ミツ</small><br>蜜行・南蜜 | 129 胆 <small>タン</small><br>胆汁・落胆 |                                  |                                  |

新出音訓 130 矢面(やおもて)

■ 著者

野地 潤家  
広島大学名誉教授、専門教育大学  
名誉教授

安岡 章太郎  
作家

愛甲 修子  
東京学芸大学附属大泉中学校教諭

有澤 俊太郎  
上越教育大学教授

石川 直美  
東京学芸大学附属大泉中学校教諭

大槻 和夫  
広島大学名誉教授、安田女子大学  
教授

大橋 勝男  
新潟大学教授

小正 真  
筑波大学附属中学校教諭

金田 弘  
国学院大学名誉教授

鈴木 健一  
東京学芸大学附属竹早中学校教諭

世羅 博昭  
鳴門教育大学教授

竹村 信治  
広島大学助教授

鶴田 清司  
船橋文科大学教授

内木 文英  
東洋大学附属星屋高等学校名誉校  
長、制作家

中島 克治  
麻布学園中学校、高等学校教諭

中村 幸弘  
国学院大学教授

難波 博孝  
広島大学助教授

根岸 隆巳  
麻布学園校長

浜本 純逸  
神戸大学教授

広瀬 節夫  
常葉学園大学教授

松本 修  
上越教育大学助教授

宮腰 賢  
元東京学芸大学教授

森島 久雄  
文芸大学教授

山元 隆春  
広島大学助教授

学校図書館株式会社  
編修部

■ 表紙イラスト  
森 真二

■ 表紙デザイン  
後藤葉子 (QUESTIO)

■ 原：木口木版画  
柚澤 彌

■ キャラクター  
おおくまみゆき

■ デザイン・図版  
岡崎デザイン事務所

小堀 文彦 篠原 俊彦

天童 編集工房 バー  
ジョン 羽子田 龍也

舟橋 菊男

■ 挿絵  
柳 昌健二

藤川 秀之

熊川 みのり

首藤 教之

相田 勤

■ 写真・資料提供  
THE FLYERS NEYPHOTIOS PPS  
通信社 アマナ・イメージズ あ  
るすふ通信 行状社 今川プロダク  
ション ジョー・オクターナル (出  
力：朝日新聞文化芸術部 AM-  
USA) 朝日観光公社 小池良幸  
東京日々新聞社 熊本県立美術館  
世界文化フォート 毎日新聞社 丸  
本美術館 読売新聞社 学校図書  
社 修部

中学校国語 3

■ 発行所  
学校図書株式会社  
〒114-8531  
東京都目黒区中目黒1-12-1005  
TEL:03-3792-8001 FAX:03-3792-8003

■ 著者  
野地 潤家

■ 印刷者  
印刷所

■ 発行所  
学校図書株式会社

代表者 伊藤 勝

〒114-8531  
東京都目黒区中目黒1-12-1005

この刊行は専門編集者によって行われ、  
本誌の印刷・製本・流通・販売・宣伝・編集  
のすべてが本誌編集部によって行われ、  
印刷・製本・流通・販売・宣伝・編集の  
すべてが本誌編集部によって行われる。